

幼児の異性役割行動に及ぼすモデルの「脱制止」効果*

琉球大学

小橋川

慧**

問 題

幼児は、社会化の過程でいろいろなモデルに接し、自分の年齢・性に適した新しい行動様式を学習する。この過程は「模倣」「同一視」等の用語によってまとめられている。

モデルの効果は、新しい反応様式の学習以外に、観察者が既に形成している「抑制」(inhibition)を弱める作用をする場合もある(脱制止効果)。たとえば、幼児の攻撃的行動は養育者の阻止をしばしば受け、幼児は多くの場面で攻撃的行動を抑制するようになる。Banduraら(1961)は、攻撃的なモデルを被験児に観察させ、その後被験児に欲求不満を経験させたところ(玩具を与えておいてすぐに取りあげる)、被験児はモデルの言語・身体的攻撃行動を模倣しただけでなく、同じように欲求不満を経験している非攻撃的モデル群の幼児に比べて、一般的な攻撃的行動(模倣によらない攻撃)の量が多かったと報告している。この一般的な攻撃行動の量が統制群よりも実験群に多く認められた結果は、モデルの行動の脱制止効果を示すものと解釈される。モデルの偏倚的行動(deviated behavior)が偏倚的行動に対する観察者の抵抗を弱める効果は、攻撃的行動に限らず、交通信号を無視する行動にも認められる(Lefkowitz et al., 1955)。

本研究は、異性役割行動を用いてモデルの脱制止効果を実証し、幼児の性役割学習に及ぼす同年児の影響を検討しようとするものである。幼児は、養育者や遊び仲間の性別化行動に対する態度や、罰、報酬等をとおして、非適切性役割行動に対して回避傾向(抑制)を形成する。

異性役割行動を回避する傾向が、幼稚園児に既に形成されていることを示した研究として、小橋川(1965)のものがある。実験者は、5才の男児の女性玩具を回避す

る傾向を測定するために、中性玩具と女性玩具(男性玩具は与えられていない)の置かれている部屋で被験児を自由に遊ばせ、女性玩具を避けている時間を測定している。同一場面における女児の行動と比較すると、女児は全員10秒以内に女性玩具に視線を向け遊びはじめるのに対して、男児は中性玩具(数も少なく古いもの)から女性玩具に眼を向けるのに平均70秒程を要している。女児は、観察時間7分の87%を女性玩具で遊んでいるのに比べ、男児は48%となっている。この結果にみられる男女差は、男児の女性玩具回避の強さを示すものと解釈される。本研究の被験児は、さきの調査の幼児よりも約1年程年長であるので、異性玩具で遊ぶこと(異性役割行動)に対する回避は前調査の幼児よりも強いと考えられる。

本実験の第1の目的は、被験児と同性の幼児(モデル)が異性玩具で遊んでいるのを被験児が観察した場合、その結果として、被験児の異性玩具を回避する傾向が弱められるか否かを検討することである。実験群の半数は同性モデルが異性玩具で遊んでいるのを観察した後、中性玩具と異性玩具しかない部屋で自由遊びの時間が与えられる。実験群の幼児が異性玩具を回避する程度は、同一場面における統制群の幼児(モデルの行動を観察しない)が異性玩具を回避する程度と比較される。

性役割行動では、モデルにとっては適切行動であっても観察児がモデルと同一または類似した反応をおこなった場合、脱逸した行動とみなされるときがある。たとえば、女の子(モデル)が女性玩具で遊ぶのはモデルにとっては適切行動ではあるが、観察児が男の子ならば、モデルの行動を採用することは観察児にとっては非適切行動を選択したことになる。従来の研究は、モデルの偏倚的行動が観察者に及ぼす脱制止の効果を検討しているが、モデルの適切行動が観察者の偏倚的行動に対する抑制を弱めるか否かについては吟味していない。本研究の第2の目的は、この点を検討することである。そのため、実験群の残り半数の被験児は、異性モデルの行動を観察した後に中性玩具と異性玩具の置かれている部屋で

* Observationally induced disinhibition of inappropriately sex-typed responses in young children.

** Akira Kobasigawa (University of the Ryukyus)

自由遊びの時間が与えられる。

異性モデル群の実験結果については、脱制止の効果が予想されると同様に、その逆の「禁止」の効果があることも予想される。たとえば、女兒モデルが女性玩具で遊んでいるのを男児が観察する場合、「これは女の子の玩具だ」「男の子は男の玩具で遊ぶのだ」などの認知過程の結果として、女性玩具に対する回避傾向がさらに強められることも考えられる。

方 法

被験児：那覇市城西幼稚園の男児45名、女児45名で、年齢の範囲は5才10か月から6才8か月、平均年齢6才3か月であった。実験のはじまる約2か月程前に被験児たちは5～6名のグループで実験室に来て遊んだ経験があり、部屋に対する「なれ」を成立させてある。被験児は男女別に、各群15名の3群にランダムに配置された。第1群（SS群）は、同性のモデルが異性玩具で遊んでいるのを観察する。第2群（OS群）は、異性モデルが被験児にとっては異性玩具とみなされる玩具と遊んでいるのを観察する。玩具はモデルにとっては同性玩具である。第3群は統制群で、上記のような観察なしでただちに実験がはじめられる。

実験設備：実験室は、一方視鏡のついている4×6(M)の部屋を用いた (Fig. 1)。鏡の前には、長さ2メー

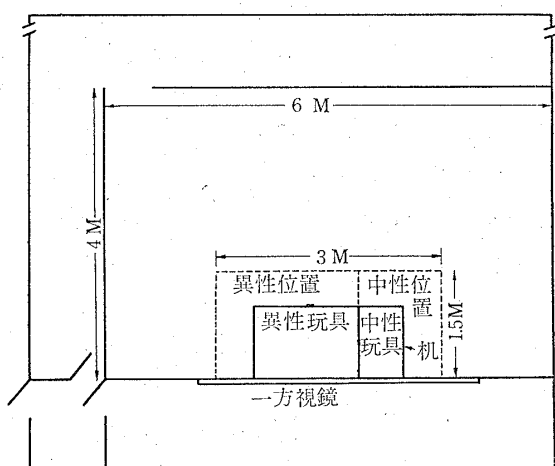


Fig. 1 実験室の設備

ルの幼児用机があり、机の3分の2は異性玩具が占め、残りの3分の1に中性玩具が置かれている。男児には男性玩具は用いられない。女兒の場合には女性玩具は部屋に置かれていない。

男性玩具には次のものが含まれている。タンク、競走

自動車、刀、鉄砲、野球道具1セット、ボクシング・グローブ。

女性玩具は、首飾り、ままごと道具、ハイヒール、人形、化粧用セット、乳母車、日傘、である。

中性玩具として次のものが用いられている。古い積木（3個）、ティンカートイ（3個）、ベッグボードとベッグ3個、さし絵のない本1冊。

玩具は20名の大学生により「性度」が評定された*。男性玩具はすべて平均6点以上が与えられており、女性玩具はすべて2点以下が与えられている。中性玩具の性度点は4点（本）から5点（ティンカートイ）の範囲を示し、わずかに男性性度の方に傾いている。

玩具の「魅力」も同様に7段階の尺度で評価されており、男性・女性玩具ともにすべて平均5.7点以上である**。これに対して、中性玩具はすべて平均点2.3以下である。中性玩具は異性玩具に比べて古いものが用いられ、数も少なく遊びの可能性も小さくしてある。このような事態で、幼児が魅力のある異性玩具を無視して魅力のない中性玩具で遊ぶ程度は、幼児の異性玩具を回避する強さを表わすと仮定してよからう。

手続き：

1. モデルの訓練 すでに実験の終わった幼児がSS群とOS群に必要なモデルの役割をおこなった。モデルは次のようにして訓練される。実験者Aはモデルを実験室に連れて来て玩具を見せ、「いっしょに遊ぼう」と言う。次の被験児が男児の場合は、実験者Aは床の上に女性玩具を広げ、日傘をさして首飾りをつけた人形を乳母車に乗せ、部屋の中を押して廻る。次に、傘と乳母車をモデルにわたして「さあぐるぐる廻ってごらん」と言う。

次の被験児が女兒の場合は、男性玩具を床の上に広げ、実験者Aは片手に鉄砲を持って、タンクと自動車を押して遊んで見せる。次に、幼児に「遊んでごらん」と玩具をわたす。

観察室にいる記録係はモデルがじょうずに遊びはじめると、実験者Bと被験児を呼びに行く。実験者Bと被験児は、モデルの訓練がはじまるころ幼稚園より大学の実験室に着くようになっている。

2. 一般的手続き 被験児は1名ずつ「ゲームをする」ために実験室に連れて来られ、実験室に入る前に、「いまゲームの部屋では他のお友だちがゲームをしていますから、この部屋で順番が来るまで待っていてちょうだい」と言われる。統制群はこのあとただちに玩具の置か

* 7点が最も男性的玩具であり、1点が最も女性的玩具。

** 7点が最も魅力的。

れている机の前に連れて行かれ、実験の教示が与えられる。

SS群の被験児は部屋に入ると、床の上にこれまでモデルが遊んでいたかのように玩具がちらかっており、同性の幼児（モデル）が異性玩具で遊んでいるのを見る。実験者Aは入口の所に黙って立っている。OS群の被験児は部屋に入ると、異性モデルが被験児にとっては異性玩具となる玩具で遊んでいるのを観察する。玩具はモデルにとっては適切玩具である。被験児が入って来て約10秒後に、実験者Aはモデルに「はい、それでは次のお友だちが来ましたから、幼稚園に帰りましょう。遊んだ玩具をもとの所に返してください」と言い、玩具がもとの位置に返されたか否かを確かめ、モデルを部屋から連れ出する。

モデルと実験者Aが部屋を出て行ったあとで、実験者Bは被験児を玩具のおかれている机の所に連れて行き、中性玩具と異性玩具の境に幼児を立たせ、次の教示を与える（これから先は統制群も同じ）。

「いまゲームの部屋ではさきに来てのお友だちがゲームをしていますから〇〇ちゃん（被験児の名前）の番が来るまでこの部屋で待っていてね。ここにあるおもちゃで遊んでいてちょうだい。すぐに順番がきます。それから、こちらのおもちゃ（異性玩具を指す）と、こちらのおもちゃ（中性玩具を指す）をいっしょにして遊ばないように」

教示を与えている間、実験者は被験者のうしろから被験児の腕をおさえており、教示が終るまで被験児が玩具に触れないようにする。実験者は「ゲームが終わったかどうかを見て来る」と言って、被験児を室内に残して部屋を出て観察室に入り、被験者のようすを見る。もし被験児が「不安」を感じている場合は、実験室にもどって「もうすぐ番がくる」と被験児に言う。これを必要とした被験児は6名いた。

10分間の観察が終ると、実験者は被験児を連れて「ゲームの部屋」に行く。ゲームは黒と白の箱を用いた単純弁別学習で、この部分は被験児の異性玩具に対する印象をぼかし、友だち間で実験について語合うのを防ぐために加えられた。ゲームは5分程で終り、失敗・成功の回数を話し合いながら実験者は被験児を幼稚園に連れて帰る、実験は4名の女性実験者によっておこなわれた。

観察の方法：観察室にいる観察者は、実験者の手が被験児の腕から離れると同時にストップ・ウォッチを押して、15秒目ごとに被験児の行動を観察し記録する。観察は10分間おこなわれ、したがって1被験児に対して40回の観察がおこなわれる。観察と観察の間は、観察者は被験児

から目を離し、時計を見ている。記録される行動は、(1)観察した瞬間に被験児が何に眼を向けているか（視線）、(2)どこに立っているか（位置）、(3)何に手を触れているか（接触）、の3行動である。各行動はさらに、「異性玩具」「中性玩具」「その他」のいずれかに分類される。「その他」は玩具以外の室内のものすべて（幼児自身も含む）を指す。「位置」は、Fig. 1に図示されているように、机の前に3×1.5(M)の「かこい」がチョークで記されており、その「かこい」を基準にして「異性」「中性」「その他」に分類される。

観察の結果、次の2種類の測定値が得られる。(1)潜時。すでに述べたように、各幼児は40回観察されている。潜時は、何回目の観察のときに被験児の視線が異性玩具に向けられたか、何回目の観察のときに異性玩具に接近し、何回目の観察のときに異性玩具に手を触れたか、で決められる。10分間完全に異性玩具を回避した幼児には、任意に41点が与えられる。したがって、潜時の範囲は1～41となる。(2)異性行動のパーセント。異性行動のパーセント（異性－％）は、「視線」を例にとると、10分間の観察中に異性玩具に眼を向けた度数を、全玩具（異性＋中性）に対する視線の度数で除し、100倍して算出される。「位置」「接触」の異性－％も同様にして求められる。

15人の被験児について、2名の観察者が別々に行動記録を行ない（1800の行動分類）、2観察者の意見の一致度（意見の一致回数×100/1800）は96%であった。

結 果

1. 測定値間の相関

被験児の3行動（視線、位置、接触）間の相互相関は、＜潜時＞＜異性－％＞の各測定値別に算出された。男児ではこれらの相関係数の範囲は、＋.81から＋.96となっており、女児では＋.77から＋.98であった。以上の相関係数はすべて1%水準で有意である。

本研究は＜潜時＞の大きさは異性玩具に対する回避の強さを示し、＜異性－％＞測定値は数値が小さい程回避傾向が強い、との仮定に立っている。各被験児の＜潜時＞の平均値（（視線＋位置＋接触）/3）と＜異性－％＞の平均値間の相関は、男児では－.82であり、女児では－.49であった。これらの相関係数は上述の仮定を支持しているといえよう。

2. 潜時の分析

3行動間の相関は比較的高く、また3行動の平均値間に有意差が認められなかったため、3行動の測定値にもとずく平均値を各被験児の測定値として、以後の分析は

おこなわれている。男児と女児は同一場面でテストされたのではなく、さらに男性玩具—中性玩具間の性度距離と、女性玩具—中性玩具間の性度距離が等しいという確証もないので、男児と女児のデータは別々に分析されている。

Table 1 には、SS, OS, 統制群の〈潜時〉の平均値が男女別に示されている。男児のデータを分散分析し

Table 1

Mean Composite Latency Scores of SS, OS and Control Groups: Boys and Girls Separately

	SS	OS	Control
Boys	4.40	11.73	10.80
Girls	3.13	4.40	5.13

SS=Model of the Same Sex.

OS=Model of the Opposite Sex.

た結果、3群間に有意差が認められた ($F=3.24$, df は 2 と 42, $P<.05$)。t 検定の結果、SS 群と OS 群、SS 群と統制群間には 5% 水準で有意差がみられたが、OS 群と統制群の間には差が認められなかった。

女児の〈潜時〉のデータは、男児群と同様に、SS 群の〈潜時〉が一番短い。しかし、分散分析の結果、3群間に有意差は見られなかった。

3. 異性—%の分析

〈異性—%〉の SS 群, OS 群, 統制群の平均値は、Table 2 が示すとおりである。このデータにもとづいて

Table 2

Mean Composite Percent-Inappropriate Scores of SS, OS, and Control Groups: Boys and Girls Separately

	SS	OS	Control
Boys	65.13	36.87	30.20
Girls	60.27	57.86	54.13

SS=Model of the Same Sex.

OS=Model of the Opposite Sex.

分散分析を行なった結果、男児群では3群間に1%水準で有意差があった ($F=8.30$, df は 2 と 42, $P<.01$)。t—検定を行なった結果、SS 群の平均値は OS 群, 統制群の平均値より有意に大であった ($P<.01$)。OS 群と統制群間には有意差は認められなかった。

女児の3平均値の大きさの順位は、男児のデータと同様に、SS 群が一番大きい。しかし分散分析の結果、3平均値間に有意な差は見られなかった。

考 察

男児 SS 群の〈潜時〉は統制群のものより有意に短く、〈異性—%〉は統制群のものよりも有意に大であった。このことは、脱逸した性役割行動を行なう同年の男児モデルに短時間接するだけで、観察児 (男) の女性玩具に対する反応に脱制止の効果があることを立証している。

SS 群の被験児は、直接自分で非適切性役割行動を行ない、その行動に対して社会的承認 (賞) が与えられ、その結果偏倚的行動に対する抑制が弱くなったのではなく、脱制止はモデルの行動を観察した結果生じたのである。その意味で本研究は、「代理的学习」 (vicarious learning) または de Charms & Rosenbaum (1960) の言う「代理的经验」 (vicarious experience) などの用語で最近まとめられている現象を取扱っている。Mowrer (1960, p. 160) は、代理的学习の成立する条件として、観察者がモデルの反応とその反応に与えられた報酬を観察することを予想している。すなわち、モデルの行動とモデルに与えられた賞を観察して、観察者はあたかも自分が反応して賞を受けたように、類似した刺激場面でモデルの反応に類似した反応を観察者も行なう確率が大きくなるのである。ところで、本実験においては、実験者はモデルに女性玩具で遊ぶことを依頼しているが、被験児の前ではモデルとの接触を避け、言語的賞も罰も与えていない。そこで表面的には、本実験の男児 SS 群は単にモデルの偏倚的行動を観察しただけで、モデルの行動を模倣しているようである。この点に関して、Crandall (1963) の実験は注目に値する。

Crandall (1963) は、「比較的くりかえし罰が与えられた行動に対して、保護者が無反応を示す (一般に無強化と言われる事態) ことは、幼児には賞の意味がある」という仮説を検討している。実験の第1段階で被験児に知覚判断をおこなわせ、全判断の4分の3に言語的罰 (誤り) を与え、第2段階における知覚判断に対して実験者が言語反応を示さなくなると、あたかも賞を得たかのように、仕事に対する被験児の成功期待度が高くなることを実証した。非適切性役割行動に対して与えられる、養育者や同輩の社会的罰 (嘲笑, なかまはずれ) は、男児の女性役割回避傾向を形成する要因のひとつとして考えられる。そして、この社会的罰は、男児の場合に女児の男性役割選択に与えられる罰の頻度よりも多いと推測されている (Brown, 1958)。この推測が正しければ、Crandall の実験結果からして、本実験のモデルの偏倚的行動に対して実験者が無反応であったことは、男の被験児にとっては「賞」の働きがあったと解釈される。そ

して、男児 SS 群に認められたモデルの脱制止効果は、(1)偏倚的行動の観察と、(2)「自分もモデルと同じように女性玩具で遊んでも罰を受けない」という「安心感」、これら2要因の結果であると説明できよう。この説明に立つと、男児 SS 群の結果は Mowrer の代理的学習の仮説に一致する。

本研究の第2の目的は、女性モデル（男性モデル）が女性玩具（男性玩具）で遊んでいるのを男児（女児）が観察した場合にも、女性玩具（男性玩具）に対する男児（女児）の回避傾向が弱くなるか否かを検討することであった。OS群はこの点を検討するために用いられたが、＜潜時＞＜異性-%＞両測定値ともに、男女ともにOS一統制群間に有意差がなく、脱制止効果は認められなかった。OS群のモデルは自分の性に当然の行動をしており、SS群とちがって、OS群の幼児には「自分もモデルと同じ行動をしても罰を受けない」という保証はないのである。その意味では、OS群は統制群に似た条件にあり、そのためにOS群と統制群の間に有意差が認められなかった、と説明できよう。ただ、男児の＜潜時＞のデータを除いては、男女ともにOS群の結果は脱制止効果の傾向を示している（Table 1, 2 参照）。このOS群と統制群の差は有意ではないが、性別化行動に対する社会的要求をはっきりまだ「内面化」していない年少群（4～5才児）を用いると、OS群にも偏倚的行動の増加がみられるのではないかとすることを示唆している。

実験にさきだち、OS群には逆に「禁止」を強くする効果もおこりうることが予想された。ミネソタ大学の Hartup* は、たとえばOS群の男児が女児モデルの行動を観察して、「これは女の子の玩具だ」「女の子は女の子の玩具で遊び、男の子は男の子の玩具で遊ぶのだ」などの認知過程の結果、女性玩具に対する回避が強くなるとすれば、このような認知過程は比較的年長児でおこるであろうし、したがって禁止の効果は年長児のOS群で認められるであろう、と指摘している。これは興味ある仮説であり、前述の年少OS群で脱制止の効果がみられるという仮説とともに、発達的研究を示唆している。

モデルの行動が、被験児の異性役割行動に脱制止の効果を及ぼしたのは、男児のデータについてのみみられ、女児には有意な効果は認められなかった。この男女差を説明するものとして、第1に、適切な性役割学習において、女の子の場合は男の子ほどに厳格さを経験せず自由も多い、という点が考えられる。Brown (1958) は、女の子が男性役割を選択する場合に、その行動に対して社

会的阻止を受けることが比較的少なく、男の子が“sissy”である場合に受けるような社会的制裁を女の子が“tom-boy”である場合に受けることはあまりない、と述べている。間宮 (1959) は、男児に比べて女児の性役割意識が不明瞭であり不安定である事実を得て、上述の Brown の見解を支持する、としている。井上 (1960) も、親の育児態度の実態調査において、男の子が女性役割をとることは、女の子が男性役割をとることよりも圧倒的に嫌われている、との結果を得ている。異性役割行動を採用するときに受ける社会的罰に男女差がある、との仮定が沖縄の幼児にもあてはまるとすれば、本実験の女児は男性玩具で遊ぶことに、強い回避傾向あるいは「不安」をもっていたとは考えられない。そこで、女児 SS 群の被験児がモデルの偏倚的行動とそれに対する実験者の態度を観察した結果おこる、罰に対する「不安」の解消の程度は統制群に比べてほとんど差がない。その結果、女児では SS 群と統制群間に差が見られなかったと解釈できよう。

女児のデータに脱制止の効果がみられなかった結果に関して、第2に、一般化された「自制」(self-control)を形成するのは男児よりも女児の方が早い、と仮説づけられる。この仮説を支持するものとして Hartup ら (1963) の研究がある。Hartup らは、本実験と類似した実験場面で幼児に異性玩具を与え、成人が幼児のそばにいる場合といない場合とでは幼児の異性玩具に対する行動に相異があるか否かについて調べている。結果として、男児群では成人不在群の異性玩具接触率は成人在群に比べて高かった。これに対して、女児では成人在・不在群間に異性玩具接触率の差がみられなかった。この結果は、女児は男児よりも養育者の在・不在に関係なく、内面化された自分の行動規準に従って行動することを示唆している。本実験で、モデルの偏倚的行動の異性役割行動に対する脱制止効果が男児のデータにのみ現われ女児には認められなかった結果は、「自制」の発達に見られる男女差に関する仮説に一致する。ただ、上記の2つの仮説のうちどちらが本研究に妥当であるか、あるいは双方ともに妥当であるか否かについては、本研究のデータだけでは不明である。

本実験では、被験児と同年の幼児をモデルとして用い、幼児の性役割学習におけるモデル児の影響を調べた。Bandura & Kupers (1964) は、児童が「自己強化」(self-reinforcement)の様式を学習したり報酬に対する抑制を形成する場合に、同年児のモデルよりも成人のモデルの影響を強く受ける、と報告している。Hartup (1964) は「好き」な友だちよりも「嫌い」な友だち

* Personal Communication, 1965, May.

の言語的承認が、幼児の単純作業反応を条件づけるのにより有効であることを実証している。これらの研究からして、モデルの脱制止効果について一般的結論をだすためには、今後、より年長のモデルやより年少のモデルを用いた実験や、被験児とモデルの交友関係を変数とした研究が必要である。

要 約

本研究の目的は(1)同性のモデルが異性玩具で遊んでいるのを被験児が観察した結果として、被験児の異性玩具に対する反応に脱制止の効果がみられるか否か、(2)異性モデルが適切玩具(被験児にとっては非適切玩具)で遊んでいるのを被験児が観察した場合にも、脱制止の効果がみられるか否か、の2点を検討することであった。

幼稚園男児45名、女児45名(年齢範囲5才10か月から6才8か月)が、同性モデル、異性モデル、統制の3群に配置された。同性、異性モデル群は、モデルの行動を短時間観察した後に、統制群は観察なしで、異性玩具と中性玩具の置かれている部屋で10分間の自由遊びの時間が与えられた。幼児の行動は15秒ごとに観察室から観察され記録された。測定値として、幼児が異性玩具に反応するまでの時間(潜時)と、観察中に異性玩具で遊んだ割合(異性一%)が算出された。

主な結果は、

(1) 男児同性モデル群の<潜時>は異性モデル、統制両群の測定値より有意に短く、<異性一%>は異性モデル、統制両群のものより有意に大であった。この結果は、異性役割行動に対するモデルの脱制止効果を示すものである。女児のデータでは、脱制止効果の傾向が認められただけで、3条件間に有意差は見られなかった。

(2) 適切な性役割行動をおこなっているモデルを観察した被験児には、脱制止効果も禁止の効果もともにみられなかった。

幼児の異性役割行動に対するモデルの脱制止効果は、モデルの偏倚的行動と、この行動に対して実験者が無反応であったこと(罰を与えなかったこと)、その2つを、観察した結果として解釈された。

<付記> 本実験を実施するにあたり、ご協力くださった城西幼稚園の先生がたと、実験者として参加した新

垣弘子、国吉勝子、大浜泰子、島尻すなお、の諸姉に対して、ここに感謝の意を表する。

文 献

Bandura, A., & Kupers, Carol J. 1964 The transmission of patterns of self-reinforcement through modeling. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 69, 1—9.

Bandura, A., Ross, Dorothea, & Ross, Sheila A. 1961 Transmission of aggression through imitation of aggressive models. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 63, 575—582.

Brown, D. G. 1958 Sex-role development in a changing culture. *Psychol. Bull.*, 55, 232—242.

Crandall, Virginia C. 1963 Reinforcement effects of adult reactions and nonreactions on children's achievement expectation. *Child Developm.*, 34, 335—354.

de Charms, R. & Rosenbaum, M. E. 1960 The problem of vicarious experience. in D. Willner (Ed.) *Decisions, values, and groups*. Vol. I. New York: Pergamon.

Hartup, W. W. 1964 Friendship status and the effectiveness of peers as reinforcing agents. *J. exp. Child Psychol.*, 1, 154—162.

Hartup, W. W., Moor, Shirley G., & Sager, Glenn. 1963 Avoidance of inappropriate sex-typing by young children. *J. consult. Psychol.*, 27, 467—473.

井上和子 1960 幼児の性差意識の発達 児童心理, 14, 756—762.

小橋川慧 1965 男児の女性玩具回避傾向について 琉球大学(未発表)

Lefkowitz, M. M., Blake, R. R., & Mouton, Jane S. 1955 Status factors in pedestrian violation of traffic signals. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 51, 704—706.

間宮武 1959 性差研究(第2報告)一性差研究の体系化と性差意識に関する研究一, 教心研, 6, 205—216.

Mowrer, O. H. 1960 *Learning theory and the symbolic processes*. New York: Wiley.

(1965年7月23日原稿受付)